

論文内容要旨

1. Pre-testing and re-testing are preliminarily necessary before full questionnaire survey
2. 3歳児の保護者における噛みごたえのある食べ物の認識
3. 3歳児とその保護者における噛みごたえのある食に関する認識調査

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

口腔衛生学講座 石黒 梓

(指導： 荒川 浩久 教授)

論文内容要旨

目的：近年、「よく噛まないで飲み込む」子どもが増加し、厚生労働省では「噛ミング 30」を推奨している。ところが、平成 23 年度県民歯科保健実態調査において、3 歳児の食事に噛みごたえのある食べ物を取り入れていると回答した保護者が記載した噛みごたえのある食べ物例を分析したところ、一定の傾向がみられないことが判明した。

そこで、生活者が利用し得る噛みごたえのある食べ物の目安を作成するために、3 歳児の食、ならびに 7 種の食品に対する噛みごたえレベルの認識の実態について質問紙調査を実施し、子どもが摂取する食事の噛みごたえは、食生活環境、保護者の噛むことの有用性に関する知識や食習慣と関連があるかどうかを検証した。

対象および方法：3 歳児歯科健康診査の受診児とその保護者を対象に質問紙調査を実施した。事前に質問紙のプレテスト、再テストを実施し、質問の意味が明確に伝わるように文言を修正し、回答の再現性を確認した。本調査では 3 歳児用と保護者用の質問紙 842 セットを 3 歳児歯科健康診査時に保護者に渡し、郵送法にて回収した。質問紙の 23.9%が回収され（分析に供したのは 193 セット）、JMP[®]9（SAS 社）を用いて、有意水準 0.05 のもとに χ^2 検定と重回帰分析にて検定した。

結果および考察：プレテストと再テストの結果、基本属性や現在の習慣に関する質問に対する回答の再現性は高く、過去の記憶やあやふやな知識に基づく判断は低いことが明らかとなった。本調査の結果では、3 歳児の保護者は噛みごたえのある食材の選択の有無に関わらず、よく噛むようにと声かけをしている者は多かった。しかし、一口のご飯の咀嚼回数はほとんどの者が 30 回未満であるという結果であった。岡崎らは、咀嚼能力は学習により獲得するものであると述べており、乳歯列が完成する 3 歳までには十分咀嚼する習慣を形成することが大切であると考えた。重回帰分析の結果、与えている食品の噛みごたえ度から算出した噛みごたえスコアが高い有意な説明変数は、離乳食完了時期が遅く、夕食にかかる時間が長く、特に噛みごたえある食材を選択していることであった。そこで、これら 3 つの要因を啓発していくことが子どもに噛みごたえのある食べ物を与えることにつながるものと思われる。

結論：プレテスト、再テストによって再現性を確認した質問紙を用い、3 歳児の食、ならびに 7 種の食品に対する噛みごたえの認識度合いの実態について集計分析した。3 歳児の保護者は噛みごたえのある食材の選択の有無に関わらず、よく噛むようにと声かけをしている者が多かった。さらに、離乳食完了期、夕食にかかる時間も噛みごたえのある食品の提供につながることから、これらの指導が必要である。今後は、子どもが好きで噛みごたえのある食品を周知させ子とともに、保護者への食育を行うことが重要であることが示唆された。